た。

5日。18：00山田線宮古駅にて集合。宿舎に直行し，食後にミーティング。なごやかな雰囲気の中にも，皆やや緊張と期待の面持で明日の予定に耳を傾ける。

6日。身障者の車イスも通れる螺旋状の歩道橋を渡り，まず，宮古市役所へ。係の方々が，養殖中心の水産業のこと，第4次港湾計画に基づく新宮古港の現状と将来像のこと，さらに防災対策としての防潮堤・消波堤のことについてご説明くださった。その中で，現在でも20m以上の津波は防ぎようがなく，ただ逃げるようにと指導できるのみだ，ということを聞き，東京の地震にまさるとも劣らぬ恐ろしさに愕然とすると同時に，このような対策にも，将来，地理学の関与すべき役割があることを感じた。市役所での活発な質疑応答の後は，浄土ケ浜から遊覧船で田老へ。船上からは海岸地形の複雑さや，養殖のブイが観察できた。田老に着く。予備知識は多少あったにせよ，海岸ぞいに灰色に続く物々しい防潮堤の偉容は想像をはるかに越えるものであった。まるで中国の城壁都市を思わせた。次に，磯鶏・藤原海岸に行き，宮古の宿舎にもどる。

7日。早朝，災害洪水位標を見る。次に，バス停近くの水産加工の現場で，わかめ加工法を熱心に聞き取る。ここでサービスしてくれた生わかめの美味には皆感激。山田町へ。日曜にもかかわらず，山田町役場では宿直の方が町の近況を話してくださった。宮古と釜石のベッドタウン化し，人口は増加しているという。「山田湾は海の十和田湖です。」と語るその様子に限りない郷土への愛着が感じられた。大槌川付近を見て釜石へ。釜石――さすがに単一企業都市である。駅に降りるや否や，もくもくとたちのぼる煙，高くて太い煙突をもつ真っ黒な新日鉄工場が，視野のほとんどを占め，威圧感をもってせまる。すぐ宿舎へ。

8日。釜石大観音から町を眺望し，市役所へ。新日鉄が町に果たす役割や，漁港と工業港の両方を兼る平田港について聞く。次に新日鉄へ行き工場見学。さらに釜石鉱業所へ行き，鉄山を見学。次に市内に戻り新日鉄の旧社宅・旧購買部をみたあと，街頭で総括をし，16：15解散。暑さの中にも秋の気配を感じさせる東北の山々をあとに，意義深い三陸巡検を終えた。

（内藤先生指導　2年　磯前厚子）

東　京　巡　検　（2月28～3月2日）

後期試験が終わってまもない2月28日～3月2日，2・3年生合同の東京巡検が行なわれた。テーマは「東京の歴史地理，都市景観，生活環境」であった。

2月28日。9：30，御茶ノ水聖橋に集合。御茶ノ水付近についての説明の後，神田明神，湯島天神へ。この付近は武蔵野台地の末端にあたり，土地の起伏が多い。神社は台地の末端の目だつ場所に立地している。上野を経て神田，秋葉原方面へ向かう。上野は江戸の町の北はずれであったが，現在は文化施設が集まり，また戦後の闇市から発達したアメ横など活気にあふれている。神田，秋葉原は卸売地区である。東京の台所として重要な役割を果たしている神田市場を見学した後，日本橋へ。

日本橋には銀行が集中している。また，隣の兜町には東京証券取引所をはじめ証券会社が集中しており，日本橋，兜町一帯はウォール街につぐ金融のセンターである。兜町，小網町を経て人形町で解散。

3月1日。10：00，門前仲町に集合。ここは深川不動，富岡八幡を中心として江戸時代から続いている町である。現在，地盤沈下などの問題があり，環境が悪いために人口は減少している。木場へ向かう。木場は材木問屋，製材所の中心地区である。以前は多数の運河が走り貯木場を連ねていたが，現在は材木の筏輸送がトラック輸送にかわりつつあるので，小運河や貯水場は埋め立てられるものが多い。佃島へ向かう。ここでは漁村のなごりが見られ，また，狭い土地がむだなく利用されていた。佃大橋を渡り，築地中央卸売市場へ。見学後，柴又へ向かう。柴又は帝釈天の存在で知られ，その門前町として発達した町である。帝釈天で解散。

3月2日。10：00，多摩プラーザに集合。田園都市線に沿った梶が谷～つくし野の多摩田園都市は，多摩丘陵の最初の開発であり，現在は人口20万であるが，完成後は40～45万になる予定である。多摩プラーザとつくし野の住宅地を見学した。多摩プラーザには個人住宅だけでなくアパートも見られたが，つくし野は個人住宅だけであった。また，つくし野では住宅地は伸びているが，駅前に東急ストアができてから商店街はほとんどつぶれてしまった。新横浜，横浜を経て伊勢佐木町で解散。

この巡検によって，これまで知らなかった東京のいろいろな面を知ることができた。遠くの知らない土地への巡検だけでなく，身近な土地を歩いてみることもおもしろく有意義なことだと思う。

（正井先生指導　3年　原口和子）

戸隠巡検（10月17～20日）

我々にとって最後の巡検となった戸隠巡検は，教官お二人，三泊四日，しかも連泊と，初めての試みが多かった。生憎雨に祟られて残念だったが，それでも自然，人文の両分野共に盛りだくさんのスケジュールだった。

今回の巡検のテーマは，1）長野県上水内郡鬼無里村地すべり地の観察と，2）同郡戸隠村の集落形態の観察，の2つに大別される。

鬼無里村地すべり地区で顕著なものは，萩の峰であって，これは融雪期の地表水に起因する。したがって地下水を原因とするゆっくりとした一般的な地すべりとはその景観を異にし，ちょっと見には土石流に似た状態を呈す（崩解性地すべり）。10月17日，初日から鬼無里村へバスで出かけた我々は（泊りは戸隠村）そこに山と言わず谷と言わず猫の額ほどの土地を切り開き切り開きして，ひたすら生きてきた山村の人々の生活を見た。その昔平家の落人が隠れ住んだとか，京都から美しい上ろうが流されてきたとか，鬼無里に関する伝説には事欠かないが，昭和も50年を数える今日，「小京都」と称して観光地の名のりを上げたこの村を見る時，今までの生き様が懸命であればあるほど麗々しいキャッチフレーズが白々しく思える。崖の上の悪路と，村を捨てた人々が残していったすすきばかり